

国語審議会があきらかに分裂していることを国民にさらけ出した昭和三十六年を主体とした、新聞紙上にみられる立場と意見の相違を明らかにする。

Ⅳ 国字問題の国語学的、政策的視点

それぞれの立場を代表するといわれる松坂忠則氏と福田恒存氏の意見を中心として考察し僕の結論らしきものを加えることにする。

● 参 考 資 料

- 朝日新聞 昭・24.1～41.1
- 毎日新聞 昭・41.1
- 言語生活（楽摩書房） 40.2 39.2 37.2 36.5 35.2 35.1 31.12
31.9 30.9
- 外国における国語の問題（国語シリーズ 47、文部省）
- 国語問題解答オ一集～オ七集（光風社）
- 私の国語教室（福田恒存著 新潮社）
- 国語国字論争（松坂忠則著 新興出版KK）
- 「潮」 昭・41.2月号（潮出版社）
- 日本語の歴史（土井忠生編 至文堂）
- 国語学概論（橋本進吉著 岩波書店）
- 国語学史（時枝誠記著 岩波書店）
- 国語と国字（大月書店）
- 言葉と生活（西尾実著 毎日新聞社）

（文責 宮本邦彦）

分詞について

—— 進行形の用法、意味とその発達過程に ついての研究——

手 島 稔 之

この論文の構成は、序論、本論、結論の3つから成る。

I 序 論

この論文で取りあげるのは動詞的形態に発達した進行形で、その用法、意味、形態の現代まで

に発達した過程を辿ることであるというその研究方針が述べられ、進行形概念とはいかなるものか、進行形をよく使う作家として知られるJ. Austen のPride and Prejudice, J. F. Kennedy の演説からの引用例と共に、概説される。

II 本 論

まず才1に単純形と進行形を比較対照《eg: He looks ill. と He is looking ill.》させることによって進行形の意味と用法を論じ、進行形は、時制、動詞の種類、文脈により異なった意味あいを持つことが明らかにされる。才2に、Hatcherの研究によって、単純形と進行形のこの両者の差異をよりいっそう明確にし、次に、OE, MEにおける進行形、現在分詞の語尾とverbal noun, The house is buildingの用法とこの3つの立場から進行形の発達過程をたどり、才4にMosséの研究に基いて現在分詞、迂説法など進行形の分析的研究が試みられる。

III 結 論

最後に、進行形は、この数世紀の間に形をよく整え、言語表現の意志に応じて使用を頻繁にし完全に一大範疇を形成するに致ったことがわかるという結びで終る。

参考図書

英語発達史	中 島 文 雄	岩 波 全 書
分詞・動名詞	乾 亮 一	研 究 社
進行形の用法	A. G. Hatcher 笠 井 満 訳	研 究 社
中世英語文法概説	K. Brunner 厨 川 文 夫 訳	研 究 社
完了形・進行形	太 田 朗	研 究 社
文法の原理	O. Jespersen 半 田 一 郎 訳	岩 波 書 店
A Handbook of English Grammar		

R. W. Zandvoort Longmans

A Modern English Grammar on historical principles IV

O. Jespersen

Histoire de la Forme Périphrastique

Être+Participe présent en Germanique I II

F. Mossé

(文責 横 山 悌 志)